

平成22年度  
田辺市の公会計財務書類4表  
(総務省方式改訂モデル)

解説と分析

## 1. はじめに

地方財政は社会保障関連経費の自然増や公債費が高水準で推移するなどにより、依然として大幅な財源不足が見込まれ、厳しい財政運営となるなか、地域社会の成熟と地方分権の推進により行政サービスの多様化、高度化が求められています。このため、将来の財政負担を見通した中長期的な視点からコストに見合うサービスを効果的・効率的に提供できる行政のシステム改革の推進や住民とのパートナーシップの形成が必要となっています。

また、住民の意識も大きく変化してきており、価値あるサービスの提供や税の効率的な使途など、事業の成果に対する行政の説明責任は大変重要なものとなっています。

さて、平成18年8月の「地方公共団体における行政改革の更なる推進のための指針（地方行革新指針）」では、発生主義の活用及び複式簿記の考え方の導入を図り、地方公営企業や第三セクターなど関連団体を含む連結ベースで公会計の整備に取り組むこととされており、本市においても、この指針に基づき財務書類（貸借対照表、行政コスト計算書、純資産変動計算書、資金収支計算書）を作成し、今後の財政運営での活用を図ることとします。

## 2. 財務書類4表について

### （1）貸借対照表（バランスシート）とは

貸借対照表（バランスシート）とは、一定の時点（決算期日）において保有する全ての資産、負債等のストックの状況を総括的に表した一覧表で、 $資産 = 負債 + 純資産$ という関係にあり、左右がバランスしている表であることからバランスシートとも呼ばれています。

資産は、行政がこれまでに建設又は取得することによって保有する財産で、財産の所有により今後どのような行政サービスを提供できるかを示すことができます。

負債は、将来行政が返済しなければならない地方債の残高や未払金、これまでの行政活動によって発生した職員の退職手当引当金等が明らかになります。

純資産は、資産と負債の差額であり、資産が負債を超えていれば後世に財産を残すことができ、負債が資産を超えている場合は、後世にツケを残すことになり、「財政負担の世代間公平を維持する」という財政運営の基本理念を説明することができるものです。

このように、バランスシートは、資産と負債、純資産の累計残高（ストック）が決算期日において一目で分かるように表示され、負債に見合った財産が形成されているかどうかの全体像の評価や財務状況の経年比較、他団体との住民一人当たりの資産状況等の比較も行うことができます。

### （2）行政コスト計算書とは

行政コスト計算書とは、資産形成につながらない1年間の行政サービスにかかる費用を表した一覧表で、当該年度にどのような行政活動をしたのかを把握することができます。

また、コストは現金の支出だけでなく、減価償却費、退職手当等引当金など非現金の支出についても計上されています。

経常行政コストは、性質別と目的別のマトリックス形式で表示されていますので、行政分野ごとにどのような性質の費用がかかっているかがわかるようになっています。

性質別は人件費等の人にかかるコスト、物件費や減価償却費等の物にかかるコスト、社会保障給付や補助金等の移転支的コスト、公債費（利払）等のその他のコストで大きく分けて4つに分類され、目的別は生活インフラ・国土保全、教育、福祉など11の行政分野別に分類されています。

経常収益は、使用料、手数料、分担金、負担金、寄付金で構成されており、行政サービスを提供する対価として得られる財源を表しています。行政分野別にそれぞれだけの受益者負担で賄われているかを見ることができます。

純経常行政コストは、経常行政コストから経常収益を差し引いた額で、一般的にはコスト超過となるため、地方税や地方交付税等の一般財源により賄わなければならないコストを表しています。

### **(3) 純資産変動計算書とは**

純資産変動計算書とは、貸借対照表の純資産の部に計上されている公共資産等整備国県補助金等や一般財源等の各数値が1年間でどのように変動したかを表した一覧表で、これまでの世代の負担分の増減を把握することができます。

純経常行政コストと一般財源や経常的な補助金等の受入を見れば、純経常行政コストが受益者負担以外の経常的な財源によりどれだけ賄われているかを見ることができます。

臨時損益は、災害復旧にかかる費用や公共資産の売却に伴う収入など臨時的な収入や費用を計上しています。

科目振替は、財源の用途が拘束されていなかった一般財源を公共資産の整備や投資等の財源として使用することになったり、反対に公共資産の処分や貸付金等の回収により用途の自由な一般財源として回収されたりした場合は純資産の中で科目の振替が必要となります。

### **(4) 資金収支計算書とは**

資金収支計算書とは、1年間の歳計現金の収入及び支出を表した一覧表で、実際の現金の動きを把握することができます。

収支の区分については、人件費や物件費等にかかる支出と地方税や地方交付税等の収入を計上した経常的収支の部、公共資産の整備等にかかる支出とその財源となる補助金や地方債等の収入を計上した公共資産整備収支の部、出資、貸付、地方債の償還等にかかる支出とその財源となる補助金や貸付金の回収等にかかる収入を計上した投資・財務的収支の部の3つに分類されています。

一般的に経常的収支の部で生じた余剰金（黒字）が公共資産整備収支の部と投資・財務的収支の部の収支不足（赤字）を補てんする形となります。

## **3. 財務書類4表の作成方法**

本市の財務書類4表は、総務省の「新地方公会計制度研究会報告書」で示された普通会計ベース及び連結ベースの財務書類（総務省方式改訂モデル）の統一基準に基づいて作成したものです。

その作成方法の基本的事項は、次のとおりです。

(1) 対象会計・団体・法人（4表共通）

		一般会計	
田 辺 市	特 別 会 計	同和対策住宅資金等貸付事業特別会計 診療所事業特別会計 木材加工事業特別会計 後期高齢者医療特別会計（一部）	普通会計
		水道事業会計 国民健康保険事業特別会計（事業勘定） 国民健康保険事業特別会計（直営診療施設勘定） 老人保健特別会計 後期高齢者医療特別会計 介護保険特別会計 分譲宅地造成事業特別会計 文里港整備事業特別会計 交通災害共済事業特別会計 簡易水道事業特別会計 農業集落排水事業特別会計 林業集落排水事業特別会計 漁業集落排水事業特別会計 特定環境保全公共下水道事業特別会計 戸別排水処理事業特別会計 駐車場整備事業特別会計	公営事業会計
一部事務組合等		13団体	田 辺 市 以 外 の 会 計
地方公社		田辺市土地開発公社	
第三セクター等		4団体	

(2) 作成の基準日（4表共通）

会計年度の最終日（3月31日）を作成の基準日とします。

(3) 出納整理期間（4表共通）

出納整理期間（4月1日～5月31日）における出納については、作成の基準日まで  
に終了したものとみなします。

(4) 基礎数値（貸借対照表）

普通会計は昭和44年度以降の決算統計数値を、公営事業会計は昭和47年度以降の決  
算統計数値を基礎数値として用います。

(5) 公共資産の評価方法（貸借対照表）

有形固定資産は決算統計数値の普通建設事業費を取得原価としています。ただし、  
普通建設事業費に区分される他団体に支出した補助金・負担金については計上しない  
こととします。

売却可能資産は市が保有する普通財産（売却時期の未定分を含む）とし、固定資産  
評価額等を参考として算定した売却可能価額とします。

(6) 減価償却（貸借対照表、行政コスト計算書、純資産変動計算書）

国の基準で示された耐用年数により、残存価格をゼロとする定額法を採用し、翌年  
度から償却を開始します。なお、土地については、非償却資産としています。



#### 4. 財務書類4表の概要

今回作成した平成22年度の財務書類4表の概要は次のとおりです。

##### 【普通会計ベース】

##### (貸借対照表)

【資産の部】	平成22年度	平成21年度	差額	【負債の部】	平成22年度	平成21年度	差額
<b>1. 公共資産</b>	<b>215,209</b>	<b>217,573</b>	<b>△2,364</b>	<b>1. 固定負債</b>	<b>55,850</b>	<b>57,490</b>	<b>△1,640</b>
(1)有形固定資産	214,639	216,899	△2,260	(1)地方債	47,278	48,660	△1,382
(2)売却可能資産	570	674	△104	(2)退職手当引当金	8,572	8,800	△228
<b>2. 投資等</b>	<b>9,479</b>	<b>9,764</b>	<b>△285</b>	(3)その他	0	30	△30
(1)投資及び出資金	1,221	1,219	2	<b>2. 流動負債</b>	<b>5,187</b>	<b>5,650</b>	<b>△463</b>
(2)貸付金	175	192	△17	(1)翌年度償還予定地方債	4,804	5,241	△437
(3)基金等	6,973	7,225	△252	(2)その他	383	409	△26
(4)長期延滞債権	1,451	1,451	0	<b>負債合計</b>	<b>61,037</b>	<b>63,140</b>	<b>△2,103</b>
(5)回収不能見込額	△341	△323	△18	<b>【純資産の部】</b>	<b>平成22年度</b>	<b>平成21年度</b>	<b>差額</b>
<b>3. 流動資産</b>	<b>7,970</b>	<b>6,264</b>	<b>1,706</b>	1. 公共資産等整備国県補助金等	61,939	62,996	△1,057
(1)資金	7,729	6,025	1,704	2. 公共資産等整備一般財源等	129,213	127,706	1,507
(2)未収金	284	300	△16	3. その他一般財源等	△19,871	△20,639	768
(3)回収不能見込額	△43	△61	18	4. 資産評価差額	340	398	△58
<b>資産合計</b>	<b>232,658</b>	<b>233,601</b>	<b>△943</b>	<b>純資産合計</b>	<b>171,621</b>	<b>170,461</b>	<b>1,160</b>
				<b>負債及び純資産合計</b>	<b>232,658</b>	<b>233,601</b>	<b>△943</b>

##### (1) 資産

資産合計は、2,326億5千8百万円で、前年度の資産合計2,336億1百万円に比べ9億4千3百万円減少しています。資産の内訳は、現在及び将来の行政サービス提供のために保有している有形固定資産は2,146億3千9百万円、売却可能資産は5億7千万円で、公共資産の資産全体に占める割合は92.5%となっています。このほか、基金69億7千3百万円を含んだ投資等は94億7千9百万円、流動資産は79億7千万円で、現金・預金77億2千9百万円、未収金2億4千1百万円がその内訳です。資産の減少の主たる要因は、資金の増加などにより流動資産が17億6百万円増加しているものの、有形固定資産の減価償却などにより、公共資産が23億6千4百万円減少したことによるものです。

資産には、道路、公園、小・中学校、保育所など田辺市所有のあらゆる施設（土地、建物、設備等）が含まれており、これらの資産は、原則として売却して換金することができないため、このところが民間企業との大きな違いです。

##### (2) 負債

負債合計は、610億3千7百万円で、前年度の負債合計631億4千万円に比べ21億3百万円減少しています。このうち市の借金である地方債の残高は520億8千2百万円、そのほか今後支払わなければならない退職手当引当金は85億7千2百万円、賞与引当金は3億8千3百万円となっています。負債の減少の主たる要因は、地方債の償還が新たな発行よりも大きく、18億1千9百万円減少したことによるものです。

##### (3) 純資産

純資産は、住民から支払われた税金（一般財源等）、国や県からの補助金を財源として取得した資産額を表すもので、総額は1,716億2千1百万円で、前年度の純資産合計1,704億6千1百万円に比べ11億6千万円増加しています。そのうち一般財源等で措置した額は1,093億4千2百万円となっています。

## (行政コスト計算書)

## 《普通会計行政コスト計算書の概要》

(単位：百万円)

	平成22年度		平成21年度		差額
	金額	構成比	金額	構成比	
<b>【経常行政コスト】</b>	<b>35,293</b>	<b>100.0%</b>	<b>35,779</b>	<b>100.0%</b>	<b>△486</b>
1. 人にかかるコスト	7,330	20.8%	7,573	21.2%	△243
(1)人件費	6,349	18.0%	6,528	18.3%	△179
(2)退職手当引当金繰入等	598	1.7%	639	1.8%	△41
(3)賞与引当金繰入	383	1.1%	406	1.1%	△23
2. 物にかかるコスト	12,721	36.0%	12,497	34.9%	224
(1)物件費	5,135	14.5%	4,880	13.6%	255
(2)維持補修費	443	1.3%	534	1.5%	△91
(3)減価償却費	7,143	20.2%	7,083	19.8%	60
3. 移転支出的なコスト	14,241	40.4%	14,865	41.6%	△624
(1)社会保障給付	6,454	18.4%	5,221	14.6%	1,233
(2)補助金等	3,192	9.0%	4,865	13.6%	△1,673
(3)他会計等への支出額	3,916	11.1%	3,645	10.2%	271
(4)他団体公共資産整備補助金等	679	1.9%	1,134	3.2%	△455
4. その他のコスト	1,001	2.8%	844	2.4%	157
(1)公債費(利払)等	1,001	2.8%	844	2.4%	157
<b>【経常収益】</b>	<b>1,520</b>	<b>4.3%</b>	<b>1,542</b>	<b>4.3%</b>	<b>△22</b>
使用料・手数料	1,076		1,092		△16
分担金・負担金・寄付金	444		450		△6
<b>【純経常行政コスト】</b>					
(経常行政コスト－経常収益)	33,773	95.7%	34,237	95.7%	△464

## (1) 経常行政コスト

1年間の経常的な行政活動を示す経常行政コスト総額は、352億9千3百万円で、前年度の経常行政コスト総額357億7千9百万円に比べ4億8千6百万円の減少となっています。性質別の内訳では人にかかるコストが73億3千万円(20.8%)、物にかかるコストが127億2千1百万円(36.0%)、移転支出的なコストが142億4千1百万円(40.4%)、その他のコストが10億1百万円(2.8%)となっています。経常行政コストの減少の主たる要因は、社会保障給付が12億3千3百万円増加したものの、補助金等が16億7千3百万円減少したことによるものです。

## (2) 経常収益

経常行政コストを賄う受益者負担を示す経常収益総額は、15億2千万円で、前年度の経常収益総額15億4千2百万円に比べ2千2百万円の減少となっており、経常行政コストに対する経常収益の割合は4.3%となっています。今後の行政サービスを運営する上で必要となる受益者負担の指標として参考とすることができます。

## (3) 純経常行政コスト

1年間の経常的な行政活動を行うために必要な財源のうち、経常収益以外の地方税や地方交付税等の純経常行政コスト総額は、337億7千3百万円で、前年度の純経常行政コスト総額342億3千7百万円に比べ4億6千4百万円の減少となっています。経常行政コストに対して95.7%を賄うこととなっています。

## (純資産変動計算書)

《普通会計純資産変動計算書の概要》

(単位：百万円)

	平成22年度	平成21年度	差額
期首純資産残高	170,461	169,999	462
純経常行政コスト	△33,773	△34,237	464
財源調達	35,462	35,394	68
地方税	8,215	8,232	△17
地方交付税	15,923	15,412	511
経常的な補助金	7,676	8,230	△554
公共資産等整備補助金	1,195	1,180	15
その他	2,453	2,340	113
臨時損益	△500	△662	162
資産評価替・無償受贈資産受入	△29	△33	4
その他			0
期末純資産残高	171,621	170,461	1,160

### (1) 期末純資産残高

貸借対照表の純資産の部に計上しています期末純資産残高は、1,716億2千1百万円で、期首純資産残高1,704億6千1百万円に比べ11億6千万円増加しています。これは、期首純資産残高が4億6千3百万円増加するとともに、純経常行政コストが4億6千4百万円減少したことによるものです。

## (資金収支計算書)

《普通会計資金収支計算書の概要》

(単位：百万円)

	平成22年度	平成21年度	差額
1. 経常的収支の部			
経常的支出	27,047	26,944	103
経常的収入	37,571	36,720	851
経常的収支（収入－支出）	10,524	9,776	748
2. 公共資産整備収支の部			
公共資産整備支出	5,604	6,487	△883
公共資産整備収入	3,866	3,955	△89
公共資産整備収支（収入－支出）	△1,738	△2,532	794
3. 投資・財務的収支の部			
投資・財務的支出	12,436	8,604	3,832
投資・財務的収入	3,754	486	3,268
投資・財務的収支（収入－支出）	△8,682	△8,118	△564
当期収支	104	△874	978
期首歳計現金残高	568	1,442	△874
期末歳計現金残高	672	568	104

### (1) 経常的収支の部

人件費や物件費等の経常的支出合計は、270億4千7百万円、地方税や地方交付税等の経常的収入合計は、375億7千1百万円で、経常的収支（収支差引額）は、105億2千4百万円の収入超過となっており、前年度経常的収支97億7千6百万円に比べ7億4千8百万円の増加となっています。これは、支出において、社会保障給付が12億3千3百万円増加しているものの、補助金等が11億5千万円減少し、収入において、地方債発行額が7億9千2百万円増加したことによるものです。

### (2) 公共資産整備収支の部

公共資産整備や整備に対する補助金等の公共資産整備支出合計は、56億4百万円、公共資産整備等の財源となる国県補助金や地方債等の公共資産整備収入合計は、38億6千6百万円で、公共資産整備収支（収支差引額）は、17億3千8百万円の収入不足

となっており、前年度公共資産整備収支25億3千2百万円の収入不足に比べ7億9千4百万円の不足額の減少となっています。これは、支出において、公共資産整備支出が3億5千万円、公共資産整備補助金等支出が4億5千5百万円減少したことによるものです。

(3) 投資・財務的収支の部

これまでの公共資産の整備に必要な財源として発行した地方債にかかる償還金や基金積立金等の投資・財務的支出合計は、124億3千6百万円、公共資産等売却収入や貸付金回収等の投資・財務的収入合計は、37億5千4百万円で、投資・財務的収支（収支差引額）は、86億8千2百万円の収入不足となっており、前年度投資・財務的収支81億1千8百万円の収入不足に比べ5億6千4百万円の不足額の増加となっています。これは、支出において、基金積立額が6億4千4百万円増加したことによるものです。

(4) 当期収支

上記(1)～(3)の各収支（収支差引額）により、本年度当期収支は、1億4百万円となり、前年度繰越金の期首歳計現金残高5億6千8百万円を加えた期末歳計現金残高は6億7千2百万円となっています。

## 【連結ベース】

田辺市では普通会計で行う事業のほか、水道事業、下水道事業をはじめ、国民健康保険事業、介護保険事業など市民生活に密接した様々な事業を行っています。また、市とは別に市町村で構成された一部事務組合、土地開発公社、法人などを通じて行われている事業もあります。

そのため、普通会計以外の特別会計、一部事務組合等の団体、一定割合以上出資している法人を連結し、普通会計だけでは見えない本来の田辺市の財政状況を把握するため、連結ベースの財務書類4表を作成しています。

## （貸借対照表）

《連結貸借対照表の概要》

(単位：百万円)

【資産の部】	平成22年度	平成21年度	差額	【負債の部】	平成22年度	平成21年度	差額
1. 公共資産	256,859	258,977	△2,118	1. 固定負債	73,351	76,439	△3,088
(1)有形固定資産	256,160	258,020	△1,860	(1)地方公共団体地方債	60,683	63,518	△2,835
(2)無形固定資産	7	7	0	普通会計地方債	47,278	48,660	△1,382
(3)売却可能資産	692	950	△258	公営事業地方債	13,405	14,858	-1453
2. 投資等	14,687	14,884	△197	(2)関係団体地方債	501	650	△149
(1)投資及び出資金	194	192	2	一部事務組合地方債	466	603	-137
(2)貸付金	198	217	△19	第三セクター借入金	35	47	△12
(3)基金等	12,758	12,920	△162	(3)退職手当引当金	12,165	12,238	△73
(4)長期延滞債権	2,341	2,367	△26	(4)その他	2	33	△31
(5)その他	11	12	△1	2. 流動負債	11,350	12,270	△920
(6)回収不能見込額	△815	△824	9	(1)翌年度償還予定地方債	6,005	6,530	△525
3. 流動資産	15,525	14,775	750	地方公共団体	5,877	6,258	-381
(1)資金	10,795	9,288	1,507	関係団体	128	272	-144
(2)未収金	1,781	2,005	△224	(2)短期借入金	4,024	4,439	△415
(3)販売用不動産	3,072	3,673	△601	(3)その他	1,321	1,301	20
(4)その他	63	58	5	負債合計	84,701	88,709	△4,008
(5)回収不能見込額	△186	△249	63	【純資産の部】	平成22年度	平成21年度	差額
4. 繰延勘定	1	4	△3	純資産合計	202,371	199,931	2,440
資産合計	287,072	288,640	△1,568	負債及び純資産合計	287,072	288,640	△1,568

### (1) 資産

資産合計は、2,870億7千2百万円で、有形固定資産は2,561億6千万円、無形固定資産は7百万円、売却可能資産は6億9千2百万円で、公共資産の資産全体に占める割合は89.4%と普通会計同様、大きな割合を占めています。このほか、基金等127億5千8百万円を含んだ投資等は146億8千7百万円、繰延勘定は1百万円、流動資産は15億2千5百万円で、資金107億9千5百万円、未収金17億8千1百万円、宅地造成にかかる販売用不動産30億7千2百万円が主な内訳です。資産の減少の主たる要因は、普通会計同様、既存資産の減価償却等により、有形固定資産で18億6千万円減少したことによるものです。

このように連結ベースでは、普通会計以外にも多くの公共資産や将来の資金につながる販売用不動産を保有していることが把握できますし、反対に今後回収しなければならない未収金があることも見えてきます。

### (2) 負債

負債合計は、847億1百万円で、このうち借金である地方債の残高は短期借入金を含め712億1千3百万円で負債全体に占める割合は84.1%と依然大きな割合を占めていますが、前年度の負債合計751億3千7百万円に比べ、大きく減少しています。そのほか今後支払わなければならない退職手当引当金（翌年度支払予定退職手当を含む）は121億6千5百万円、賞与引当金は6億4百万円、長期未払金及び未払金は6億2百万円となっています。

(3) 純資産

資産から負債を差し引いた純資産合計は、2,023億7千1百万円で、前年度の純資産合計1,999億3千1百万円に比べ、24億4千万円（1.2%）増加となっています。

(行政コスト計算書)

《連結行政コスト計算書の概要》

(単位：百万円)

	平成22年度		平成21年度		差額
	金額	構成比	金額	構成比	
<b>【経常行政コスト】</b>	70,156	100.0%	70,728	100.0%	△572
1. 人にかかるコスト	12,533	17.9%	12,904	18.2%	△371
(1)人件費	10,839	15.4%	11,048	15.6%	△209
(2)退職手当引当金繰入等	1,092	1.6%	1,219	1.7%	△127
(3)賞与引当金繰入	602	0.9%	637	0.9%	△35
2. 物にかかるコスト	18,745	26.7%	18,425	26.1%	320
(1)物件費	9,247	13.2%	8,839	12.5%	408
(2)補助金等	691	1.0%	786	1.1%	△95
(3)維持補修費	8,807	12.5%	8,800	12.5%	7
3. 移転支的コスト	36,040	51.4%	37,255	52.7%	△1,215
(1)社会保障給付	29,287	41.8%	27,303	38.6%	1,984
(2)補助金等	5,287	7.5%	7,681	10.9%	△2,394
(3)他会計等への支出額	787	1.1%	1,137	1.6%	△350
(4)他団体公共資産整備補助金等	679	1.0%	1,134	1.6%	△455
4. その他のコスト	2,838	4.0%	2,144	3.0%	694
(1)公債費（利払）等	2,838	4.0%	2,144	3.0%	694
<b>【経常収益】</b>	25,367	36.2%	25,710	36.3%	△343
使用料・手数料	1,106		1,134		△28
分担金・負担金・寄付金	10,526		10,660		△134
保険料	4,367		4,530		△163
事業収益	9,154		9,153		1
その他	214		233		△19
<b>【純経常行政コスト】</b> (経常行政コスト－経常収益)	44,789	63.8%	45,018	63.7%	△229

(1) 経常行政コスト

経常行政コスト総額は、701億5千6百万円で、性質別の内訳では人にかかるコストが125億3千3百万円（17.9%）、物にかかるコストが187億4千5百万円（26.7%）、移転支的コストが360億4千万円（51.4%）、その他のコストが28億3千8百万円（4.0%）となっています。普通会計と比べると、社会保障給付292億8千7百万円が普通会計64億5千4百万円に比べ228億3千3百万円（453.8%）と大幅な増加となっていることから、国民健康保険事業や介護保険事業など市が福祉目的として行う特別会計や福祉サービスを提供している連結対象団体、法人の割合が大きく占めていることが把握できます。

(2) 経常収益

経常収益総額は、253億6千7百万円で、経常行政コストに対する経常収益の割合は36.2%と高くなっています。これは普通会計では4.3%と地方税や地方交付税等の財源で賄われる割合が高くなりますが、連結対象会計、団体、法人は原則受益者負担で運営されているためです。

(3) 純経常行政コスト

純経常行政コスト総額は、447億8千9百万円で、前年度の450億1千8百万円と比べ2億2千9百万円の減少となっています。なお、経常行政コストに対して63.8%を賄うこととなっています。

(純資産変動計算書)

《連結純資産変動計算書の概要》

(単位：百万円)

	平成22年度	平成21年度	差額
期首純資産残高	199,929	198,939	990
純経常行政コスト	△44,789	△45,018	229
財源調達	46,112	46,100	12
地方税	8,215	8,232	△17
地方交付税	15,923	15,412	511
補助金等受入	19,664	20,088	△424
その他	2,310	2,368	△58
臨時損益	△563	△683	120
出資の受入・新規設立	239	1,052	△813
資産評価替・無償受贈資産受入	1,445	△459	1,904
その他	△2	0	△2
期末純資産残高	202,371	199,931	2,440

(1) 期末純資産残高

期末純資産残高は、2,023億7千1百万円で、期首純資産残高1,999億2千9百万円に比べ、24億4千2百万円増加しています。これは、純経常行政コストで447億8千9百万円、臨時損益で5億6千3百万円減少していますが、地方税や地方交付税等の一般財源や補助金等の受入により461億1千2百万円、無償受贈資産受入等で14億4千5百万円の財源等を調達できたことなどによるものです。

(資金収支計算書)

《連結資金収支計算書の概要》

(単位：百万円)

	平成22年度	平成21年度	差額
1. 経常的収支の部			
経常的支出	59,940	60,051	△111
経常的収入	75,324	71,129	4,195
経常的収支（収入－支出）	15,384	11,078	4,306
2. 公共資産整備収支の部			
公共資産整備支出	6,222	7,477	△1,255
公共資産整備収入	4,100	4,588	△488
公共資産整備収支（収入－支出）	△2,122	△2,889	767
3. 投資・財務的収支の部			
投資・財務的支出	12,035	8,520	3,515
投資・財務的収入	387	545	△158
投資・財務的収支（収入－支出）	△11,648	△7,975	△3,673
翌年度繰上充用金	△119	△231	112
当期収支	1,495	△17	1,512
期首歳計現金残高	9,300	9,305	△5
期末歳計現金残高	10,795	9,288	1,507

(1) 経常的収支の部

行政コスト計算書同様、社会保障給付が普通会計に比べ大幅に伸びている経常的支出合計は、599億4千万円で、経常的収入合計は、753億2千4百万円となっています。経常的収支額（収支差引額）は、153億8千4百万円で、普通会計同様、支出において、社会保障給付が21億1百万円増加しているものの、収入において、地方交付税が5億1千2百万円、事業収入が6億4百万円、短期借入金が増加したことなどによるものです。

(2) 公共資産整備収支の部

公共資産整備支出合計は、62億2千2百万円で、公共資産整備収入合計は、41億円

となっています。公共資産整備収支（収支差引額）は、21億2千2百万円で前年度に対して7億6千7百万円の不足額の減少となっていますが、依然として収入不足が生じていますので、経常的収支額の余剰金で賄われることとなります。

(3) 投資・財務的収支の部

投資・財務的支出合計は、120億3千5百万円で、投資・財務的収入合計は、3億8千7百万円となっています。投資・財務的収支（収支差引額）は、116億4千8百万円で前年度に対して36億7千3百万円の不足額の増加となり、さらに収入不足が生じていますので、不足分について経常的収支額の余剰金で賄われることとなります。

(4) 当期収支

連結における本年度当期収支は、14億9千5百万円（翌年度繰上充用金1億1千9百万円除く）となり、前年度繰越金の期首歳計現金残高93億円を加えた期末歳計現金残高は107億9千5百万円となっています。

## 5. 財務書類4表を活用した財務分析

今回作成した財務書類4表は、国の基準に基づいて作成したものです。作成後の分析数値の判断基準が明確に示されていません。

類似団体と一定の比較は可能ですが、田辺市の数値が適正なものかどうかを判断することは大変難しいものがあります。

そうした状況の下ではありますが、今回作成した財務書類4表をもとに分析した主な指標等は次のとおりです。

(1) 住民1人あたり普通会計財務書類4表

財務書類4表は、団体の規模等により他団体と単純に比較することは困難ですが、住民1人あたりで算出することにより比較しやすくなります。

	平成22年度
年度末人口（人）	81,191

《住民1人あたり普通会計貸借対照表》

(単位：千円)

【資産の部】	平成22年度	【負債の部】	平成22年度
1. 公共資産	2,651	1. 固定負債	688
(1)有形固定資産	2,644	(1)地方債	582
(2)売却可能資産	7	(2)退職手当引当金	106
2. 投資等	117	(3)その他	0
(1)投資及び出資金	15	2. 流動負債	64
(2)貸付金	2	(1)翌年度償還予定地方債	59
(3)基金等	86	(2)その他	5
(4)長期延滞債権	18	負債合計	752
(5)回収不能見込額	△4	【純資産の部】	平成22年度
3. 流動資産	98	1. 公共資産等整備国県補助金等	763
(1)資金	95	2. 公共資産等整備一般財源等	1,592
(2)未収金	4	3. その他一般財源等	△245
(3)回収不能見込額	△1	4. 資産評価差額	4
資産合計	2,866	純資産合計	2,114
		負債及び純資産合計	2,866

《住民1人あたり普通会計行政コスト計算書》  
(単位：千円)

	平成22年度	
	金額	構成比
<b>【経常行政コスト】</b>	434	100.0%
1. 人にかかるコスト	89	20.5%
(1) 人件費	78	18.0%
(2) 退職手当引当金繰入等	7	1.6%
(3) 賞与引当金繰入	4	0.9%
2. 物にかかるコスト	157	36.2%
(1) 物件費	64	14.7%
(2) 補助金等	5	1.2%
(3) 維持補修費	88	20.3%
3. 移転支出的なコスト	175	40.3%
(1) 社会保障給付	79	18.2%
(2) 補助金等	40	9.2%
(3) 他会計等への支出額	48	11.1%
(4) 他団体公共資産整備補助金等	8	1.8%
4. その他のコスト	13	3.0%
(1) 公債費(利払)等	13	3.0%
<b>【経常収益】</b>	18	4.2%
使用料・手数料 分担金・負担金・寄付金	13 5	
<b>【純経常行政コスト】</b> (経常行政コスト－経常収益)	416	95.9%

《住民1人あたり普通会計純資産変動計算書》  
(単位：千円)

	平成22年度
期首純資産残高	2,100
純経常行政コスト	△416
財源調達	437
地方税	101
地方交付税	196
経常的な補助金	95
公共資産等整備補助金	15
その他	30
臨時損益	△6
資産評価替・無償受贈資産受入	△1
その他	0
期末純資産残高	2,114

《住民1人あたり普通会計資金収支計算書》  
(単位：千円)

	平成22年度
1. 経常的収支の部	
経常的支出	333
経常的収入	463
<b>経常的収支(収入－支出)</b>	130
2. 公共資産整備収支の部	
公共資産整備支出	69
公共資産整備収入	47
<b>公共資産整備収支(収入－支出)</b>	△22
3. 投資・財務的収支の部	
投資・財務的支出	153
投資・財務的収入	46
<b>投資・財務的収支(収入－支出)</b>	△107
当期収支	1
期首歳計現金残高	7
期末歳計現金残高	8

(2) 社会資本形成の世代間負担比率

社会資本形成の結果を示す公共資産のうち、純資産による形成割合を見ることによって、これまでの世代によって既に負担された分の割合を見ることができ、また地方債に着目すれば、将来返済しなければならない今後の世代の負担分の割合を見ることができます。

社会資本形成の財源が純資産によるものか、地方債によるのか、その依存割合を見ることで世代間負担の指標となります。

社会資本形成の過去及び現世代負担比率 (%)	=	純資産合計 ÷ 公共資産合計 × 100
社会資本形成の将来世代負担比率 (%)	=	地方債残高 ÷ 公共資産合計 × 100

《社会資本形成の世代間負担比率》

(単位：百万円)

項 目	平成22年度	平成21年度
公共資産合計	215,209	217,573
純資産合計	171,621	170,461
地方債残高(資本形成としての長期未払金及び未払金を含む)	52,082	53,934
社会資本形成の過去及び現世代負担比率	79.8%	78.4%
社会資本形成の将来世代負担比率	24.2%	24.8%

(3) 歳入額対資産比率

歳入総額に対する資産の比率を計算することにより、ストックである資産の形成に何年分の歳入が充当されたかを見ることができます。資本的な支出に重点を置いてきたのか、費用的支出に重点を置いてきたのかが示されるとともに、この比率の年数が多いほど社会資本の整備が進んでいると考えられる反面、維持管理費が発生し負担が増加する傾向になってきます。

純資産合計との比較によって、これまでの世代による社会資本形成に何年分の歳入が充当されたかがわかります。

歳入額対資産比率(年)	=	資産合計 ÷ 歳入総額
歳入額対純資産比率(年)	=	純資産合計 ÷ 歳入総額

《歳入額対資産比率》

(単位：百万円)

項 目	平成22年度	平成21年度
資産合計	232,658	233,601
純資産合計	171,621	170,461
歳入総額	45,758	42,603
歳入額対資産比率	5.1年	5.5年
歳入額対純資産比率	3.8年	4.0年

(4) 有形固定資産の行政目的別割合

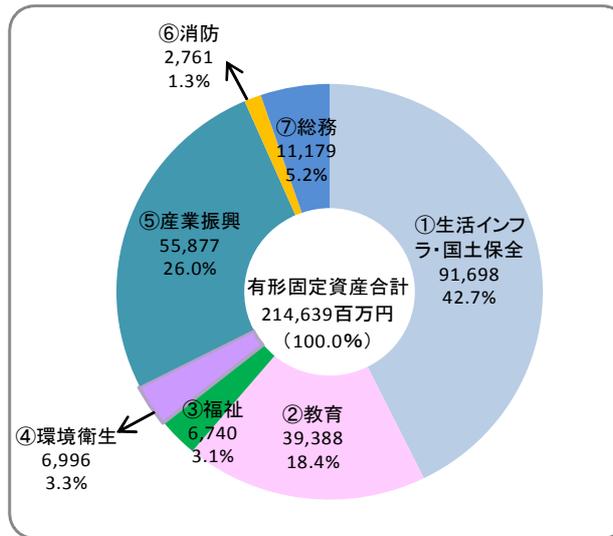
有形固定資産の行政目的別割合を見ることにより、行政分野ごとの資産の比重を把握することができます。また、有形固定資産を経年比較することにより、社会資本形成の推移を見ることができ、これまでどこに重点が置かれてきたかがわかります。

《有形固定資産の行政目的別割合》

(単位：百万円)

行政目的	平成22年度		平成21年度	
	金額	構成比	金額	構成比
①生活インフラ・国土保全	91,698	42.7%	91,567	42.2%
②教育	39,388	18.4%	39,116	18.0%
③福祉	6,740	3.1%	6,918	3.2%
④環境衛生	6,996	3.3%	7,377	3.4%
⑤産業振興	55,877	26.0%	57,384	26.5%
⑥消防	2,761	1.3%	2,969	1.4%
⑦総務	11,179	5.2%	11,568	5.3%
有形固定資産合計	214,639	100.0%	216,899	100.0%

《平成22年度有形固定資産の行政目的別割合》



(5) 資産老朽化比率

有形固定資産の減価償却額を積み上げた減価償却累計額は、これまで取得した社会資本の維持コストと見ることができるため、この比率は施設の老朽化率の意味合いがあります。また、新規の資産形成より減価償却の方が大きいと有形固定資産が減少していることとなります。

$$\text{資産老朽化比率 (\%)} = \frac{\text{減価償却累計額}}{\text{(有形固定資産合計 - 土地) + 減価償却累計額}} \times 100$$

(単位：百万円)

項目	平成22年度	平成21年度
償却資産取得価額	294,759	290,468
減価償却累計額	138,874	131,731
資産老朽化比率	47.1%	45.4%

(6) 地方債の償還可能年数

地方債の返済のために、毎年の収入のうち、返済にあてることが可能な経常的な収入をもって返済したと仮定した場合の所用年数です。年数が少ないほど地方債の残高が少なく、財政状況が健全であるといえます。

$$\text{地方債の償還可能年数（年）} = \frac{\text{地方債残高}}{\text{経常的収支額（地方債発行額及び基金取崩額を除く）}}$$

《地方債の償還可能年数》

(単位：百万円)

項 目	平成22年度	平成21年度
地方債残高	52,082	53,934
経常的収支額	10,524	9,776
(控除) 地方債発行額	2,355	1,563
(控除) 基金取崩額	67	322
地方債の償還可能年数	6.4年	6.8年

### (7) 受益者負担比率

行政コスト計算書の経常収益は、受益者負担の金額にあたるため、経常収益の経常行政コストに対する割合を算定することにより、受益者負担比率を算定することができます。また行政分野別においても、受益者によりどの程度の割合で財源が賄われたかを見ることができます。

$$\text{受益者負担比率（％）} = \frac{\text{経常収益}}{\text{経常行政コスト}} \times 100$$

(単位：百万円)

項 目	平成22年度	平成21年度
経常収益	1,520	1,542
経常行政コスト	35,293	35,779
受益者負担比率	4.3%	4.3%

《平成22年度行政分野別受益者負担比率》

(単位：百万円)

項 目	総額	生活・インフラ	教育	福祉	環境衛生
経常収益	1,520	47	50	339	520
経常行政コスト	35,293	3,071	3,557	12,111	4,547
受益者負担比率	4.3%	1.5%	1.3%	2.8%	11.4%

項 目	産業振興	消防	総務ほか
経常収益	54	202	308
経常行政コスト	5,303	1,796	4,908
受益者負担比率	1.0%	11.3%	6.3%

### (8) 行政コスト対公共資産比率

行政コストの公共資産に対する比率を見ることで、資産を活用するためにどれだけのコストがかかっているか、あるいはどれだけの資産でどれだけの行政サービスを提供しているかを見ることができます。

$$\text{行政コスト対公共資産比率（％）} = \frac{\text{経常行政コスト}}{\text{公共資産}} \times 100$$

《行政コスト対公共資産比率》

(単位：百万円)

項 目	平成22年度	平成21年度
経常行政コスト	35,293	35,779
公共資産	215,209	217,573
行政コスト対公共資産比率	16.4%	16.4%

(9) 行政コスト対税収等比率

純経常行政コストに対する一般財源等の比率を見ることで、当年度に行われた行政サービスのコストから受益者負担分を除いた純経常行政コストに対して、どれだけが当年度の負担で賄われたかを見ることができます。

比率が100%を下回っている場合は、翌年度以降へ引き継ぐ資産が蓄積されたか、あるいは翌年度以降へ引き継ぐ負担が軽減されたことを示しています。反対に比率が100%を上回っている場合は、過去から蓄積した資産が取り崩されたか、あるいは翌年度以降へ引き継ぐ負担が増加したことを示しています。

純経常行政コスト	÷	(一般財源+補助金等受入
行政コスト対税収等比率 (%)	=	[その他一般財源等]+減価償却による財源増
		[公共資産等整備国県補助金等]) × 100

《行政コスト対税収等比率》

(単位：百万円)

項 目	平成22年度	平成21年度
純経常行政コスト	33,773	34,237
一般財源	26,591	25,984
補助金等受入	7,676	8,230
減価償却による財源増	2,234	2,247
行政コスト対税収等比率	92.5%	93.9%

(10) プライマリーバランス (基礎的財政収支)

地方債や財政調整基金等を加味せずに算出された歳入歳出差引額が、ゼロあるいはプラスであれば持続可能な財政運営であることを示しています。

プライマリーバランス (基礎的財政収支)	=	[歳入総額 - (繰越金 + 地方債発行額 + 財政調整基金及 び減債基金の取崩額)] - [歳出総額 - (地方債元利償 還額 + 財政調整基金及び減債基金の積立額)]
-------------------------	---	---

(単位：百万円)

項 目	平成22年度	平成21年度
歳入総額 (繰越金を除く)	45,190	41,161
地方債発行額	4,601	3,606
財政調整基金及び減債基金の取崩額	0	0
歳出総額	45,086	42,035
地方債元利償還額	7,364	7,012
財政調整基金及び減債基金の積立額	1,599	939
プライマリーバランス (基礎的財政収支)	4,466	3,471